



KENYA

# 世界に心を開こう —— ジャンボ ケニア ——

坂井 務

島根県邑智郡美郷町立邑智小学校

◆実践教科 総合的な学習の時間

◆時間数 9時間

◆対象学年 4年生

◆対象人数 34名

## カリキュラム

### ■実践の目的

- ・ケニアの国の様子について知る。
- ・ケニアの人々の生活振りの違いを知ることを通して、世界には貧富の差が存在することを知る。
- ・日本が人的支援をしていることを知る。

### ここが素晴らしい!

グーグルアースや平均寿命グラフ、阪神大震災時の写真等を上手に使い、子どもたちが世界の問題に興味を持ち、自分達のこととして考えられるように工夫されていました。また授業で用いた資料は誰でも使用可能で、みんなが実践できる授業内容でした。

- ・困っている人々のために何かできることをしようとする心情を培う。
- ・地図や写真から情報を読み取ったり、取捨選択したりする力を育てる。

### ■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 世界の中のケニア	・知っている国を発表し、位置を確認する ・ケニアの位置を知る	グーグルアース
2 時限目 ケニアの様子を知る	・ケニアの音楽を聞き感想を発表する ・ケニアの様子を撮影した3枚の写真を見て気付いたことを発表し、ケニアについて考える	写真3枚 CD
3 時限目 ケニアの学校について知る	・ケニアの学校の様子について知る ・日本の学校との共通点相違点を考える ・ケニアの子どもたちの夢を知る	ワークシート・資料1 写真
4 時限目 ケニアの人々の生活の様子を知る	・裕福な家庭の子どもたちの学校や生活の様子を知る ・豊かではない人々の生活の様子を知る	ケニアの子どもたち（学研） ワークシート・資料2
5 時限目 日本とケニアの生活の様子の違い	・ケニアの町の様子をビデオで見る ・日本との違いを考える ・小学校の校長先生のエピソードを聞く	町を撮影したビデオ 小学校の校長先生の写真
6 時限目 日本とケニアの平均寿命の違い	・日本とケニアの平均寿命を知り、違いの理由を考える ・世界の平均寿命マップを見て考える	平均寿命世界マップ パワーポイント
7 時限目 世界の貧困を考える	・ハンガーマップを見て何を示す地図か考え世界の現状を知る ・貧困の輪について知り、どこで貧困の輪を断ち切るか考える	ハンガーマップ 写真 パワーポイント
8 時限目 日本の国際協力	・日本の国際協力について知る ・青年海外協力隊員のインタビューを見る ・自分ならどんな国際協力をするか考える	ビデオ パワーポイント
9 時限目 国際協力の心	・阪神淡路大震災の様子を知る ・クワボンザ村のおばあさんの話を聞く ・これまでの自分を振り返り何ができるか考える	写真 パワーポイント

## 授業の詳細

### 1 世界の中のケニア

グーグルアースを用いる。これを利用するだけで、子どもたちの興味関心を引きつけることができる。

まずは、自分が知っている世界の国々をリストアップする。時間を限定して次々と書かせる。

そして、その中から一カ所だけ自分が行きたい国を決める。何人か指名して、グーグルアースでその国を表示する。すると、まるで空を飛んでその国へ行っているような錯覚に陥る。これだけで子どもたちは大いに盛り上がる。

最後に、ケニアを確認する。日本との位置関係もだいたいつかめてくる。これから、ケニアの勉強をすることを知らせ、どんなことを知りたいか、ノートに記述させた。

### 2 ケニアの様子を知る

前時の感想から、「ケニア＝動物」という固定しつつある概念を崩す方向で内容を組み立てた。まずは、「ケニアの曲です。」と紹介して現地で購入したCDの曲を流す。子どもたちの中には「ハクナマタタ」「ジャンボ」という言葉を聞き取った子もいた。

次に、「ケニアで撮った写真です。」と前置きをして①②③の写真を一枚ずつ見せる。

①の写真を見せた瞬間、子どもたちのケニアに対するイメージは激変した。



①ナイロビ市内一望

#### 児童の反応

- ・ケニアは大都会だと思った。
- ・すごい町だと思った。
- ・ビックリした。
- ・自然ばかりだと思っていたのに全然違った。

②の写真を見せると、やや安心した様子がうかがえた。



②サファリの様子

#### 児童の反応

- ・自然がすごい。
- ・たくさんの動物が住んでいる。
- ・やっぱり動物がいるんだ。

③の写真を見せ、次のように問うた。「この建物は何でしょう。」児童は、これが家だとはなかなか思えなかったようである。倉庫や動物を飼うための建物という意見が大半を占めた。



③土と石の家

全ての写真を見せた後、全部ケニアの写真であることを再び確認をした。

#### 児童の感想

- ・一枚の写真だけで決めるんじゃなくて、他の写真も見て判断した方がいい。
- ・日本も同じで、首都と田舎は全然違うから、一枚の写真で判断するんじゃなくて、何枚か違う写真で見た方がいい。

### 3 ケニアの学校について知る

日本とケニアで最も比較しやすいのは学校についてである。しかも、関心も高い。

まずはじめに、ケニアの料理の写真を見せる。



④ランチメニュー



⑤ランチメニュー



⑥学校の給食

④⑤を見せると、児童は、口々に「おいしそう。」の声をあげた。その次に、⑥を見せる。児童はこ

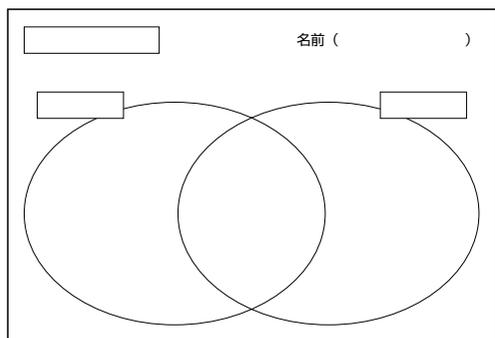
れが給食だということがなかなか分からなかったが、それが分かったとたん、日本の給食との違いに愕然としていた。



教室の様子

続いて、学校の様子を写真で紹介をする。校舎や教室の子どもの様子である。いくつかの質問を受け、

日本とケニアの学校の共通点と相違点を、ベン図を使って比較した。(資料1)



ベン図

### 児童の反応

共通点：学習の内容が同じものが多い。

国が違って勉強をしている。

相違点：机 いす 教室の明かり など多数

そして、ケニアの小学校の子どもの将来の夢を紹介した。訪問した小学校でインタビューしたところ、ケニアの児童の多くは、医師・パイロット・教師・弁護士といった職業に就きたいという夢を持っていた。その理由はお金をかせいで家族のくらしを楽にしたいというのが大半を占めた。

### 児童の感想

- ・自分で自分の家族のためにがんばっている人がいるから、尊敬しました。ケニアの人はがんばっていることが分かった。
- ・日本と似ているところや全然違っているところがあっておもしろかった。日本より大変なくらしをしていると思った。
- ・学校が狭いし、あまり給食もないからビックリしました。
- ・日本は裕福だけど、ケニアはかわいそうだ。

給食が少ないから。

- ・僕たちみたいに恵まれた環境で勉強して大人になってお金をかせいで、自分のために使うより、貧しくても家族のためにがんばって大人になって家族に楽をさせてあげる方が、すごいと思った。

## 4

時限目

### ケニアの人々の生活の様子を知る

ウガリを混ぜるしゃもじから導入をした。料理に使う物ではないかと予想が収斂していった。ここでウガリを紹介し、実際に粉も見せた。

続いて、ケニアを紹介する本「ケニアの子どもたち」(学研)を用いて裕福層の子どもの学校の様子や家庭の様子を知らせた。現地で購入した4年生の算数の教科書を紹介し、実際に問題に挑戦をさせた。(資料2) 同等のレベルの学習内容であることが分かったようである。

1 □に入る数字は何でしょう。

(a)  $4 \times \square = 28$

(b)  $28 \div \square = 4$

(c)  $63 \div \square = 9$

(d)  $9 \times \square = 63$

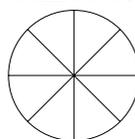
(e)  $\square \times 8 = 56$

(f)  $\square \div 9 = 10$

(g)  $6 \times \square = 42$

(h)  $\square \div 4 = 9$

2 6分の1ほど塗りましょう。



資料2 算数の問題

前時で紹介した学校に通う子どもたちのくらしと、今紹介している学校の子どもたちとは生活の違いがあることを説明した。



⑦スーパーのレジ



⑧サッカーボール



⑨おもちゃ

⑦から順に見せていった。日本とあまり変わらないスーパーの様子に「日本と同じだ。」の声が聞こえてきた。しかし、次の写真を見せると子どもたちが一変した。



八百屋

#### 児童の反応

- ・店が木でできている。
- ・レジがない。
- ・商品に日が当たっている。
- ・狭い

多くの人はこういうお店を利用していることを知らせる。

続いて、⑩⑪の写真を見せる。驚きの声やあっけにとられる表情。

外の店がたくさんあったり、自分たちで作ったおもちゃで遊んでいることを知らせ、自分たちのくらしと比べてどうか感想を書かせた。



⑩おもちゃ



⑪自作のボール

#### 児童の感想

- ・私たちはいなかでも都会でも食べている物や使っている物は同じです。
- ・ケニアの国の中でも快適なところと、貧しいところがあるのはおかしいと思いました。
- ・算数の勉強が僕たちと同じです。スーパーも結構いいところもある。あと、自分でサッカーボールとかおもちゃを作っているからすごいと思いました。

## 5 時限目 日本とケニアの生活の様子の違い

町の様子を撮影したビデオを流す。写真とはまた違った反応である。車がガタガタと揺れている様子や雰囲気伝わるのがいい。逆に「気付いたこと」や「分かったこと」を記述する段階になると、画面が動いてしまうことが裏目になり記述数

が少なかった。

次に、日本との違いを考えてみた。「日本は○で、ケニアは○○。」という形でまとめさせた。本時のビデオの中のことでもいいし、これまで学習してきた内容でもいいと伝えた。

#### 児童の反応

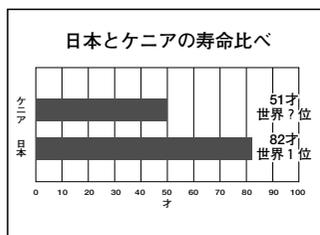
- ・日本は豊かでケニアは貧しい。
- ・日本はすっきりで、ケニアはすっきりでない。
- ・日本は物が丈夫になっているけど、ケニアは丈夫じゃない。
- ・日本は店が大きいけど、ケニアの店は小さい。
- ・日本は学校の給食が多いけど、ケニアは少ない。
- ・日本は学校に行けるけど、ケニアは学校に行きたくてもいけない人がいる。
- ・日本はデパートや大きい建物が多いけど、ケニアはあんまりない。
- ・日本は自動販売機があるけど、ケニアにはない。
- ・日本は道がきれいだけど、ケニアは道がでこぼこ。
- ・日本は機械、ケニアは自然。
- ・日本は新しい、ケニアは古い。
- ・日本は賑やか、ケニアは静か。
- ・日本は店がいっぱい、ケニアはちょっとしかない。

「では、日本は幸福で、ケニアは不幸なのですか。」と問うたところ、子どもたちは絶対そうだというわけではないという。「ケニアの人はケニアのことしか知らないから不幸とは思わないんじゃないか。」「物がたくさんあっても幸せとは限らない。」このような意見が出た。

最後に、私財をなげうって小学校を作った校長先生の話をした。物が無い生活の中で、何とか子どもたちに勉強をさせたいと願う一心で行動をおこした方だ。子どもたちは静かにこのエピソードを聞いた。「校長先生すごい！」と感銘を受けていた。

## 6 時限目 日本とケニアの平均寿命の違い

日本人の平均寿命を問う。長生きをする人や、そうでない人もいるけれど、だいたいどれくらいまで生きる人が多いかという意味であることを知らせ、予想をした。日本人の平均寿命はおよそ82才、世界第1位である。(2005年WHO調べ)



平均寿命比べ

続いて、ケニアの平均寿命を聞く。子どもたちは、60才くらいではないかという意見が多かった。実際には、およそ51才。(2005年WHO調べ) どうしてこんなに違いが出るのかを考えた。

子どもたちから出た意見は、次の通り。

- ・病院がないのではないか。
- ・食べ物がないのではないか。
- ・水がないのではないか。
- ・衛生的でないのではないか。
- ・薬が買えないのではないか。
- ・病気を治す技術がないのではないか。

これまでの学習の内容から、子どもたちは予想をすることができていた。また、世界の平均寿命マップを見て、アフリカの国々の平均寿命が低く、欧米諸国や日本の平均寿命が高いことに気づいた。

### 児童の感想

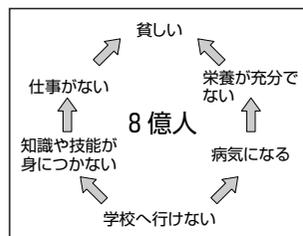
- ・ほくは大きくなったらケニアに行ってケニアの人を助けたい。
- ・日本とケニアの人たちと差がありすぎる。
- ・ビックリしました。わたしもやれることがしたいです。

## 7 時限目 世界の貧困を考える

ハンガーマップ (国連世界食糧計画作成) を提示し、何を表す地図か予想する。食べ物が足りて

いるかどうかを表す地図であることを知らせ、気づきをノートに書かせた。子どもたちは、「世界には食べ物に困っている国がある。」「日本、ヨーロッパ、アメリカなどの国は困ってない色に塗ってある。」「アフリカの国々は困っている人が多い。」ことに気づいた。

その後、貧困の輪について説明をし、苦しい状況にいる人たちは世界に約8億人いることを説明した。ただし、一国の中でも貧富の差があり、裕福な人や貧しい人がいることを確認した。



貧困の輪

このことについては、これまでの学習から容易に理解ができた。

そして、貧困の輪を止めるとしたら、どこで止めるかと問うた。この問いは少し難しかったようである。子どもたちは、「栄養が行き渡るように野菜を育てる。」「病気にかからないように、薬を飲む。」などのような意見を出した。

## 8 時限目 日本の国際協力

前時の貧困の輪を確認した後、日本では、支援を必要としている国に日本人が出向き、一緒に暮らしながら国際協力をしていることを知らせた。ここではJICAのホームページの写真を利用した。



その後、二人の協力隊員のインタビューを見せた。さらに、SCC (Save the Children Centre) で活動しておられる久保田さんのメッセージを子どもたちに聞かせた。

メッセージの内容は次の通り。

私はこのケニアに住んで15年目になります。私も、男の子を二人ここで育てています。小学校5年生と4才です。

私が、うちの子どもを通じてここの子どもたちの世界を見ると、そうですね、恵まれている子、それから毎日困難だらけの子いろんな子がここで生きています。ですがただ一つ言えることは、みんなそれぞれ自分にプライドを持って生きています。

貧しい子は貧しい子で、学校から家へ戻れば自分の仕事として水くみ、家の中の掃除、下の小さい妹や弟の世話、そういうのがあります。ただ、それをその、いやとかそういうことではなく、自分が一つの、これをしないと家が困ってしまうということがそれぞれの子どもにあるので、がんばってプライドを持ってやっているといます。

そういう子どもを見ると、わたし自身も本当に、小さなこと、大きいこといろんな出来事が毎日起こりますが、どれに対してもがんばって前向きにやっています。

日本に住んでいるみなさんも、ここと状況は違いますが、それぞれ自分が毎日生きる意味、それから、自分のプライドを大切に毎日過ごしてもらいたいと思います。

このメッセージを聞いた後、子どもたちに自分が隊員になるとしたらどんなことをして国際協力をするか考えさせた。「自動車を直す。」「道をつくる。」「食べ物を育てる。」といった考えが出てきた。

## 9 時限目 国際協力の心

阪神淡路大震災で被害を受けた町の様子を見せる。給水に並ぶ人々、体育館で避難生活をする人々の写真を次々に見せる。日本で暮らしていても、時として災害に見舞われ不自由な生活を強いられる可能性もあることを子どもたちに話した。

その後、当時、青年海外協力隊員としてケニアで活動をしていた高見早苗氏が体験したエピソードを子どもたちに話した。概略は以下の通りである。

阪神淡路大震災のことを知った村のお年寄りが、「役立ててほしい」と氏に5シリング（約10円）

を託す。困った氏は村長に相談するが、村長は「持って帰れ。それがこの村のやり方だ。おばあさんは自分にできることをやっただけだよ。」と言ったという。そして、数日後には「日本で大地震があった。村の人間が困ったときは助け合うものだ。」という村長による呼びかけで日本円にして8000円（教師の月収が5000円くらい）ほどが集まった。（国際協力 2003年9月号より）

子どもたちは聞き入っていた。教師の説明よりも、このようなエピソードが子どもの心を打つ。

最後に、今までの自分を振り返らせた。「人ごとだった。」「かわいそうに思っているだけだった。」という発言が大半を占めた。

### 児童の感想

- ・ほくは、ちょっとでもいいから、食べ物やお金を出したいと思う。ほくは、口だけだけど、ケニアのおばあちゃんは、自分がやれることができすぎいいと思いました。是非、ほくも困っている人たちのためになりたいです。
- ・私はテレビを見ていて他の国が台風で家がくずれていても「あーあ、あんなになって・・・。でも私には関係ない。」と思っていたけど、先生と勉強して私たちは裕福に暮らしていることが実感できました。アフリカ州のみんなのくらしを見て、なんだか、そう感じました。それと、今日見た阪神淡路大震災の写真にびっくりしました。あのおばあさんは、日本の人を一人でも助けたかったんじゃないかなと思いました。

### 成果と課題

#### 《成果》

授業後、一人の女の子がやってきて次のように言った。「先生、こうしたらいいって、自分で思うんですけど、いざ本当にするとなると、なかなかできないんです。」何か行動をおこすべきだと自分で思っているけれど、なかなかそれができないでいるもどかしさや、自分自身に対する歯がゆさが伝わってきた。4年生という発達段階から考えれば、「世界の実情を知り意識を広く外に向ける」ことができる段階でまずは良いと考えられると思う。

「自分ができることをすればいいんだよ。」私の口から出た言葉だった。この言葉は、クワボンザ村の村長の言葉と同じだった。

社会科で、住んでいる市や県について学んでいる状況の小学4年生にとって、遙か遠くのケニアに思いをはせることが、とてつもなく現実からかけ離れた事柄であることは事実である。しかし、世界の中には異なる文化を持った人たちが存在し、しかも私たちの住む日本とつながりを持っているのだと学ぶことにより、内側にしか向いていなかった自分の意識を広く外側に向けるための良いきっかけであった。

比較の対象を持つことができた児童は、ケニアの人々のくらしを知ることを通して自分たちのくらしを見つめることができた。自分たちが恵まれた環境で育っていることや、他の人のために行動をおこすことが尊いということである。つまり、広く世界を知ること、深く自分を見つめる糸口をつかむことができたと思う。

また、それぞれの授業の中で、研修で撮影した

写真やビデオ、そして現地で購入した教材を有効に活用できた。ほとんど知識のない異国の様子を知るためには写真やビデオや物が絶対に必要であると改めて感じた。

#### 《課題》

- ①自分たちができることを考え、行動に移すまで実践を続けられなかったのが残念だった。行動して体験してこそ本物の力になるので、今後の自分自身への大きな課題としておきたい。
- ②出前講座とのリンクなど外部講師を招聘し、もっと多面的に異文化に触れる機会を単元計画に組み込むと良かった。児童の興味関心の高まりがさらに増していたのではないかと考えられる。
- ③もっと活動を取り入れると良かった。例えば100人村ワークショップや水くみ体験などである。良いタイミングで活動を取り入れることにより、児童の理解や共感が深まったのではないかと考えられる。

#### 参考文献・資料

ケニアの子どもたち（学研）

もう一枚の世界地図（WFP 国連世界食糧計画）

ハンガーマップ <http://www.jawfp.org/goods/hunger.html#getmap>

WFP 国連世界食糧計画 <http://www.wfp.or.jp/index.php>

平均寿命世界マップ <http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/1630.html>

グーグルアース <http://earth.google.co.jp/>

神戸 災害と戦災 資料館 <http://www.city.kobe.jp/cityoffice/09/010/shiryokan/index.html>

国際協力 2003年9月号（JICA）